

サンフランシスコ・ベイエリアにおける移民の子どもへの教育 ——公立学校における「英語学習者」に対する教育に着目して——

文京学院大学 小林宏美

【1. 目的】

本報告の目的は、アメリカのサンフランシスコ・ベイエリアにおいて移民の子どもたちに対してどのような教育プログラムが提供されているのかを、サンフランシスコ統合学区およびオークランド統合学区を事例として、現状と課題を考察することである。サンフランシスコ・ベイエリアの公立学校では、近年移民人口の増加に伴い人種民族構成がますます多様化している。サンフランシスコ統合学区の2018年度人種民族別構成は、ラティノ32%、アジア系30%、白人14%、オークランド統合学区は、ラティノ46%、アフリカ系アメリカ人24%、アジア系12%となっている。これに伴い、英語能力が十分ではない子どもも増加している。2018年度現在、サンフランシスコ統合学区には16,960名（全在籍数の28%）、オークランド統合学区には15,671名（全在籍数の31%）の英語学習者（English Learner）がいる。英語学習者とは幼稚園から12年生までの児童生徒で、家庭言語が英語以外でかつカリフォルニア州の英語能力評価標準試験で、通常の授業についていけないだけの英語能力に欠けると判断された者をいう。

【2. 方法】

本報告は、発表者が2018年9月～2019年3月までサンフランシスコ・ベイエリアに滞在して実施した調査に基づく。調査対象は、行政機関での担当者へのインタビューやサンフランシスコ統合学区の小学校2校、オークランド統合学区1校で、英語学習者に対する教育プログラムの授業観察および管理職、教職員に対して半構造化インタビューを行った。

【3. 結果】

サンフランシスコ統合学区では、英語学習者に対して「Dual Language」「Biliteracy」「Secondary Dual Language」「Newcomer」「World Language」「English Plus」の6つのプログラムが提供されている。これらのプログラムの特徴は、その割合に違いはあるものの、ほとんどが英語学習者の母語を指導言語として使用しているところにある。中でも渡米したばかりの移民の子どもを集めて1年間集中的に英語とアメリカの文化を指導する「ニューカマースクール」は、アメリカ社会への適応を促すプログラムで、教育関係者や行政機関からの期待と評価が高い。1年間限定のプログラムで集中的に英語学習とアメリカの文化を学ぶことができる。一方で課題も挙げられる。第一に、ニューカマースクールの1年間、移民の子どもたちだけの教育環境で学ぶことが挙げられる。このような環境は子どもたちのアメリカ社会への統合が遅れる要因となる可能性もある。第二に、移民の子どもたちの第一言語が多様であることである。多様な言語に対応できる教師の確保は容易ではない。第三に、とりわけ少数派言語の場合、使用する教材やテキストが十分整備されていないことが挙げられる。個々の教師が独自の教材を作成して使用していることも少なくない。

【4. 結論】

サンフランシスコ・ベイエリアの移民の子どもたちへの教育、とりわけ多様な言語を母語とする英語学習者に対する教育は、英語と子どもの母語の双方を活用した教育方法が主流であり、システマティックに実施されていた。一方、ニューカマースクールの1年間、移民の子どもたちだけの教育環境は、子どもたちのアメリカ社会への統合が遅れる要因となる可能性がある。